

## 地域価値を高める双方向高大連携の試み

花崎 美紀

杉山 裕司

花崎 一夫

橋本 功

**【要旨】** 本稿は、現在広く行われている高大連携の問題点を整理し、問題点の解決につながる新しい形の「大学と高校のコラボレーション」を実験的に構築した。これは、「大学生と高校生」、「大学教員と高校教員」、「大学教員と高校生」、「高校教員と大学生」の間の双方向コミュニケーションが可能なコラボレーションであり、地域価値を高めるための試みである。大学生は信州大学人文学部で「英語科指導法」の授業を受講している学生であり、関係した大学教員は同大学の英語学を専門とする教員である。一方、高校生は長野県松本県ヶ丘高等学校の生徒であり、関係した高等教員は同高等学校の英語担当教員である。大学生が高校生に英作文を指導するということを軸に、高校側と大学側が、たがいに、波及的教育効果および地域価値をもたらす仕組みを作り、高大連携を実践した。双方向コミュニケーションの手段は直接対面、インターネットそしてペーパーの3種類である。約1年後にこの効果について分析した。その結果、この高大連携の形および方法は従来行われていた高大連携の問題点のいくつかを克服し、加えて地域価値を高めることが可能なものであることが明らかになった。

**【キーワード】** 高大連携、双方向、教科指導法、地域価値

### 1. はじめに

「高大連携」と言われ始めて久しい。文部科学省が高大連携の推進の

姿勢を初めて明確に打ち出したのは、1999年の中教審答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」においてであった。この答申は、大学での授業を受講しそれを高校の単位として認定することや、大学において高校の協力も得て補習授業を行うことなど、具体的な連携の在り方を示している。この答申がきっかけとなり、全国で高大連携の取り組みが急速に広がった。これらの取り組みは、現状では一定の成果を上げていると言えようが、同時に、発展段階にみられる様々な問題点をはらんでいるのも事実である。本稿では、それらの問題点を解決しうるような地域価値を高める双方向高大連携の形を提案し、その試みとその成果の報告を行うものである。

## 2. 高大連携の現状及び問題点と、それらの問題点を解決する双方向高大連携の提案

一般に高大連携活動の柱となっているのは、「大学等での授業履修・課題成果に対する単位認定」、「科目等履修生や聴講生などの制度利用」、「大学教員による講義等実施」であり、大学側に専門のオフィスを作って対応している場合が多い。(例：九州大学の九州大学高大連携推進専門委員会、立命館大学の高大連携推進室など) 具体例を一つあげると、明治大学では「プレカレッジプログラム」を実施しており、この名前が示すとおり、高校生に大学の授業を体験してもらい、それを高校の単位として認めている。このように、高校と大学の「接続教育」を行っているのが高大連携の現状である。

高大連携の各種取り組みは、一般的には、大学にもそして高校にもメリットのある活動として理解されているようである。大学サイドにとっては、高校サイドに大学を知ってもらうという広い意味での入試広報活動の一環として位置づけられていることが多い。また高校と連携することにより、高校生の実情や大学教育への期待を大学側が知り、

そこで得られたものを大学教育活動の改善に生かしていくことが可能である。一方、高校サイドにとってのメリットとしては、高校生へ刺激を与えることで進学したいという感情を強めたり、また、大学との関係強化が図れる機会が与えられることが挙げられる。また、最近大きく取り上げられ不安視されている、「学力の向上が停滞しかねない」、「学習意欲が維持できない」などの点を解消する施策として位置づけている連携も多いようである。(福岡2002)

実際に、そのメリットを裏付けているのが以下の表1である。表1は、大学・学部決定時に影響を受けた要因と大学満足度の関係を表しているものであるが、その中でも、「大学説明会・公開授業」は、大学・学部決定時に最も影響を受けた要因の一つであり、さらに、その要因によって大学・学部を決めた学生は、大学に対する満足度が高いことがわかる。<sup>1)</sup>

一方で、高大連携は、この数年間で飛躍的に広がったため、多くの問題点を抱えているのも事実である。具体的には、以下の3点が問題

表1 大学・学部決定時に影響を受けたものと大学満足度の関係

		大学満足度					後輩への 勧め度
		総合	施設設備	進路支援	教員	授業教育 システム	
と て も 影 響 を う け た も の	大学の教育理念に共感	161.0	153.1	205.8	199.2	228.4	190.7
	大学説明会・公開授業	134.2	130.7	143.0	149.6	156.3	147.6
	先輩の勧め、体験談	132.6	120.4	136.4	141.2	146.3	151.7
	大学HP	129.8	139.4	171.8	150.2	169.6	143.7
	進学情報誌	119.8	117.3	129.8	124.3	138.0	129.8
	入学案内・パンフレット	119.2	127.1	136.3	125.3	133.3	128.3
	高校の先生の勧め	106.7	100.8	103.2	118.8	113.6	37.3
	家族の勧め	105.7	101.7	117.6	107.7	103.5	38.7
	友人も受験する	87.8	101.9	103.3	84.8	99.7	30.8
	全体集計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	32.9

(ベネッセ文教総研「大学満足度調査」2001年5月)

\* 数値は指数表示:「とても満足(勧めたい)」%+「まあ満足(勧めたい)」%×0.5

■=全体集計値よりも120%以上満足指数が高い/□=同80%以下

点として挙げられるであろう。高校側からよく出される問題点としては、(1) 高校生は、高校の授業が終わってから参加することが多いので、放課後あるいは土曜日に大学の授業を受けることになるが、放課後は完全学校週5日制の実施に伴い時間割に余裕がないために参加が難しいし、土曜日は部活動を行っている学生は参加しにくい。(増子2002) 大学側からよく出される問題としては、(2) 高校への出前授業は、大学教員と高校教員との個人的つながりによるボランティアで行われていることが多く、従って結果的にごく一部の教員に負担が集中し、かつ、高大連携事業に参画する大学教員に対する大学からの評価が低いために、事実上、ボランティア活動になってしまうことが多い。(淵田 2004) 上述のよく指摘される2つの問題点に加え、我々は、さらにもう一つ問題点があると分析している。すなわち、(3) もともと中教審の答申に答えるべく高大連携が推進されたという背景があるためか、高大連携は高校生の学力向上が主眼になっており、そこには大学生の学力向上や、地域全体としての価値の創造といった視点が欠けているように思われる。

では、以上の問題点を解決するにはどうしたらいいのであろうか。

上述の問題点(1)を解決するためには、高校生が大学の授業を受けるだけでなく、高校において出前講義を行ったり、インターネット等を活用した、つまり、お互いのところに出かけていく必要の少ない、高校と大学間のコラボレーションを実現するための制度の構築をすればよいであろう。

また、(2)(3)の解決のためには、大学生を参加させ、大学生の学力向上、そして地域価値をあげることも視野に入れた高大連携を構築する必要があるであろう。そもそも高大連携というと、まだまだ入試、出張講義、公開講座等、大学へのアドミッションに関わる事業を連想しがちで、なかなか大学生の教育効果といった点にまで広げて考

えるまでには至っていない。これを行っているのは、我々の知る限りでは関西大学の「学校インターンシップ」の取り組みだけである。この取り組みは、教職課程をとっていない学生でも、地域の中学・高校においてインターンシップを行い、中学・高校生への刺激になると同時に、大学生の学力向上も目指している。(平成17年度教育GP採択) 関西大学高大連携運営委員長(関西大学学長補佐)の品川氏曰く、「学校インターンシップを始めた当初の趣旨は、教員志望者に就業体験の場を提供することだった。卒業年次に行う教育実習では、教員としての資質を試し、動機を持続するには遅すぎる。しかし、関西大学では、学校インターンシップ生の対象を教員志望ではない学生にも広げている。というのは、この取り組みは人間形成に目を見張る効果をもたらすことがわかったからだ。その理由は、若者はより若い世代に接することで急速に責任感を身につけていくところにあると思われる。企業や行政の現場でのインターンシップがおとなに立ち混じり、社会に順化していくプロセスだとすれば、学校インターンシップは学生が年少者を世話することで自分の成長の過程を振り返り、年長者として自覚し、自分自身の今後に目を振り向ける契機である。そこには学生を大学の内部に囲い込むことでは得られない教育効果がある。」(品川2006) このような大学生の教育効果を考え、そして地域全体で若者達を育成しそれを通して地域価値をあげようとするようなプログラムに取り組みれば、上の問題点の(2)及び(3)は解決するであろうと思われる。すなわち、大学においては、広報活動の一環というだけの価値ではなく、大学生の教育、また、地域貢献という目的を持たせることによって、それに参画する価値を見いだす大学教員が増え、(2)(3)の問題が解決するのではなかろうか。つまり、高大連携の目標を、高校生の育成のみならず、大学在学学生への教育効果、社会貢献・地域連携と捉え、社会全体で若い世代を育てるなかで大学と高校がそ

の一翼を担うものと受け止め直す必要があるであろう。

大学生の教育効果をねらい、大学生を高大連携に参画させることで、さらに一つ副次的な効果が現れる。表1から明らかな通り、高校生の大学・学部決定時に最も影響を及ぼした要因の一つに、「先輩の勧め・体験談」というものがあり、この要因は、大学への満足度につながることを示されている。大学生を高大連携に積極的に参加させることは、とりもなおさず、大学生が高校生にふれあう機会が増えることになり、高校生にとっては、先輩の生の体験談が聞ける貴重な体験を得ることになる。この点を見ても、大学生を高大連携に参画させる意義は大きい。

よって本稿では、以下の要件を満たす双方向高大連携を提案するものである。

#### (1) 本稿が提案する双方向高大連携

- a. 目的は、次代の知的継承者である高校生の「接続教育」のみならず、同じく次代の知的継承者である大学在学学生への教育、そして社会貢献・地域連携とする。
- b. 高校生だけでなく、大学生もが参加できるようなプログラムとする。
- c. プログラムは、出前授業、高校生の大学授業への参加、インターネットを活用し大学に来なくてもコラボレーションできる制度など、様々なプログラムから成り立つ総合的なプログラムとする。

### 3. 双方向としての取り組みの報告

信州大学人文学部英語学分野と長野県立松本県ヶ丘高校は、2006年4月11日にコラボレーション協定を結び、以下の4点において連携を行うことになった。(一部4月以降追加)

(2) 「信州大学英語学分野と長野県立松本県ヶ丘高校コラボレーション協定」4つの柱

- a. 県ヶ丘高校英語科の希望する生徒に対し、英作文を添削するチューターシステムを導入することにより、高校生の英語運用能力を向上させるとともに、教員を目指す学生の指導力をあげる。
- b. 県ヶ丘高校英語科の授業を年に数回（4回の予定）訪問し、高校の英語教育の現状を知るとともに、高校側の生の声を聞き、英語指導案を作成する際の参考にする。また、その指導案をもとに、高校生相手に模擬授業を行う。
- c. 信州大学から出前講義を行う。
- d. 信州大学学生が、県ヶ丘高校の学生の進学相談に応じる。

名称を「コラボレーション協定」にしたのは、もちろん、高大連携が抱える問題点で明らかになったように、大学から高校生へという一方通行になりがちな高大連携を見直し、「共に」学生の教育を行い、それを通して、「共に」地域価値をあげることが可能な連携を組みたいという意志の表れである。

また、参加する大学生については、「英語科指導法」を受講している学生に限定した。第1の理由としては、教育実習に行った後の教育実習事後指導に参加する学生から、初めて教育実習に行くととまどいを覚え萎縮してしまうという数多くの報告を受けており、教育実習に行く前に、「教える」という立場から、高校の授業を見る経験を作る必要があると考えたことが挙げられる。第2の理由としては、初めて高大連携を推進するのに、高校生を教えることに意欲がある学生を参加させたコラボレーションにしたいという思惑があったということが

挙げられる。

上記の4点においてコラボレートすることを通して、第2章で明らかにしたこれまでの高大連携が抱える問題点を解決しうるような、本稿が提案する地域価値をあげる双方向高大連携を実現しようとしている。つまり、英作文添削や進路指導や出前講義を行うことを通して「次代の知的継承者」である高校生の育成を目指し、かつ、添削を、これまた「次代の知的継承者」である大学生に行わせることを通じて大学生の英語力と指導力を向上させ、高校生と交わることで自分の成長過程を振り返らせると同時に、生徒を指導する立場を与えることで重大な責任感を感じさせ、大学生の人間的成長を促すことを目指した。そして、大学と高校が連携して、つまり地域全体で次代の知的継承者を育て、共に地域価値を上げることを目標としたのである。また副産物として、教育実習に行く前に、「教える」という立場から授業を見学し、多くの教育実習生が感じる不安を少しでも取り除くように計画されてもいる。さらに、Perlや信州大学が契約しているblackboardシステムを通して、お互いがいるところに赴かなくてもコラボレーションできるようなシステムをインターネット上に構築した。

次に、具体的には、どのようなことを行い、それがどのような結果をもたらしたかを報告することにする。

### 3.1. 英作文のコラボレーション

#### 《期待される成果》

大学生にとっては、人の英作文を添削することを通して自分の英語力を上げると同時に、指導力をあげ、さらには高校生がどのような間違いをおかしやすいのかを知ることを通して、将来行う教育実習に役立てることができるであろう。

高校生にとっては、英作文を大学生に添削してもらうことによって

家庭教師に見てもらおうようなきめ細かい指導を受けることが可能になり、直接英語力の向上につながることを期待できる。

#### 《このコラボレーションの工夫》

いろいろなコラボレーションの方法があった中で、英作文におけるそれを選択した理由には次の3つがあげられる。第一に、正解・不正解を決定するのが比較的容易であること。第二に、大学の研究成果を指導の中に取り入れ易いということ。そして第三に、高校の授業外でできることである。

上記の理由の中で第一の理由が、英作文においてコラボレーションをする最大の理由であった。というのも、例えば小論文の様なものを大学生が採点する場合には、大学生の主観が入ってしまう恐れがあり、それを高校生に押しつけるのは、場合によっては教育上逆効果になる可能性があるのに対して、大学生がきちんと調べれば正解か不正解かを定めることができるような課題においてコラボレーションすれば、大学生・高校生双方にとって教育的効果が得られるであろうと言えるからである。

また、大学での研究成果を大学生を通して世の中に還元するという意味でも、英作文におけるコラボレーションは、効果的であると言えるだろう。高校においては、英語は技能教科と定義付けされる傾向もあり、スピーキング力に通じる英語力の養成にかなりの力を注いでいる。そのような状況の中で、英作文のポイントとなる英文法事項に関して、満足のいく説明を与える時間を授業内に設けることが難しいのが現状である。そこで、英文法を研究している大学生がその研究成果を高校生に伝えることは、大学生・高校生共にメリットがある活動と思われる。

最後に、高校において授業外でできるということも、英作文でコラボレーションをする大きな理由の一つとなったことを指摘したい。高

校は、放課後は完全学校週5日制の実施に伴い時間割に余裕がないのが現状であるが、その中で、英作文の課題は、宿題としてあるいは放課後に少しの時間をとって行うことができる。このために、英作文におけるコラボレーションの実現が可能になったとも言えるのである。

次に、英作文のコラボレーションにおいての大きな工夫についてだが、一つの英文法項目について、1ヶ月の時間をかけたという点であると言える。

英作文の添削は、上記の通り、大学生にとっても高校生にとっても能力向上が期待できる。ところが、大学生の英語能力の不足が原因で間違った添削をしては逆効果であるので、以下のように、一つの文法課題を4週間完結にし、4ステップを踏んだ。

### (3) 英作文添削の4ステップ

- | 大学側で行うこと                           | 高校ですること       |
|------------------------------------|---------------|
| [1] 当該英文法項目の教員による説明                | 指定問題の英作文      |
| [2] 高校生に出される問題を含む数多くの問題を解き、その答え合わせ |               |
| [3] グループで高校生の英作文添削                 | 英作文の添削済解答受け取り |
| [4] 高校生の英作のエラーアナリシス                |               |

大学生にとって、高校生の英作文を添削する前にその文法箇所についての説明を教員から受けることで、高校生に何を指導すればいいのかが体得できるようにプログラムされ、かつその問題を実際に自分で解いてみることを通して、何がわからずどういった間違いを起こしやすいのか、そして、大学生自身で解いた問題を答え合わせすることを通して、どのように指導すればいいのかも体得できるようにプログラムされている。このように実際に高校生の英作文を添削する前に、何を指導すればいいのか、どこに気をつければいいのかを体験すること

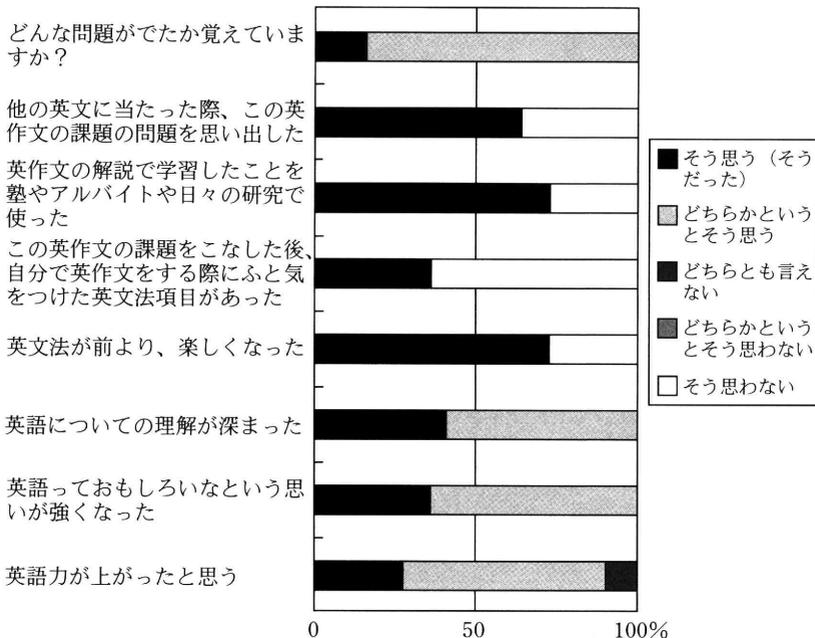
を通して、間違っただ削をすることが減り、高校生の英語運用能力の向上に寄与できたと言えるであろう。

《結果》

大学生の英語力の向上にはめざましいものがあった。(3)の2段階目で、どれくらいの問題が解けたかに対するの大学生の自己申告の平均は、約64.3%であった。ところが、同じような別の問題(該当文法項目の一つが仮定法であったが、仮定法の別の問題など)を8月に解いてもらったところ、その正答率は、97%であった。高校生の間違いを直すことを通して、細かいことにまで気を配るようになったことがよく現れている。

アンケートにおいても、これは顕著に見ることができる。英語力が伸びたと思うかということに関する質問事項は以下のものではあったが、

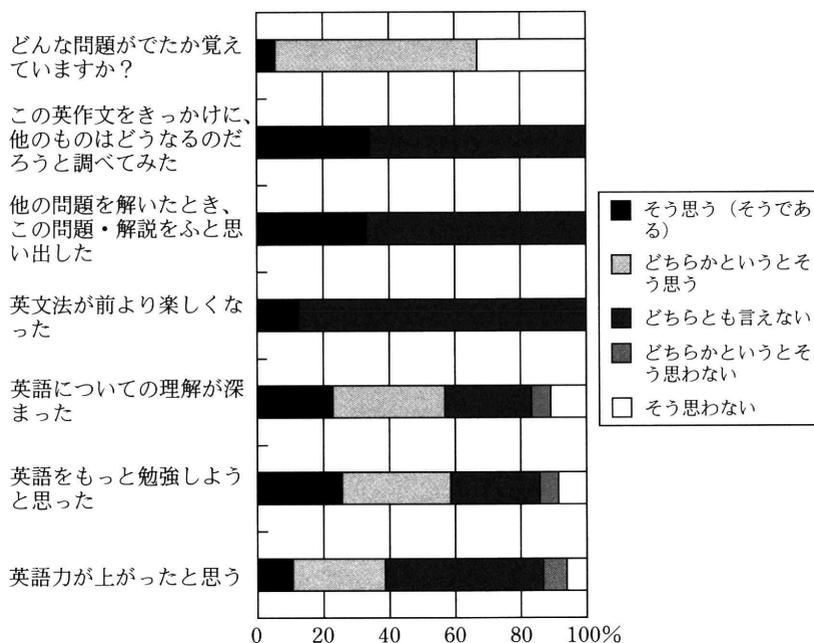
表2 大学生の英語力向上に対する自己評価



そのどれも高い数値を示している。

一方、高校生の英語力はどうかであろうか。以前から県ヶ丘高校では、2人のALTの方に英作文の添削をやってもらっており、さらに意識の高い学生の中には、お金を払って英作文の添削をやってもらっている者もいる。このことを前提に、つまり英作文の添削はこのコラボレーションにおけるそれが初めての試みではないということを前提としてアンケート結果を見てみたい。すると、この英作文におけるコラボレーションが、高校生の全般的な英語力向上に寄与したことが認められると言えるであろう。<sup>2)</sup> 特に注目するべき点は、「他の問題を解いたときに、この問題・解説をふと思い出した」という問いに対して肯定で答えた高校生が多いことである。問題・解説を思い出すことによって、そのときに犯した間違いを繰り返すことが避けられることにな

表3 高校生の英語力向上に対する自己評価



り、この点においても英語力向上につながっているとと言えるのは間違いない。

なお、このコラボレーションも含めた英作文の添削を通して目指す、英語力の向上に関する今後の課題について付記しておくことにする。英作文の添削のねらいはきめ細かな指導であるが、高校生が、その効果を十分に発揮できているかについて最終的な判断を下すには時期尚早と言えよう。現場ではそのやり方についても試行錯誤を繰り返している。高校の現場での一例をあげると、学生が書いてきた英作文の間違いを最初から直すのではなく、まずは間違いに下線だけを引き、なぜそれが間違いかを考えさせ、できれば自分で間違いを直させた後に初めて間違いをきちんと正してやるというやり方を試みたりしている。しかしこのやり方の欠点は、添削を終えるまでに時間がかかりすぎると、自分で自分の間違いが分からずに生徒が途中で簡単に投げ出してしまうことが多いということである。このような状況をも、英作文のコラボレーションも含めて、今後英作文の添削を通してどのように生徒の実力の向上を図っていったらいいのかを包括的に検討しなければならないと言えるのではないか。

### 3.2. 授業参観 及び模擬授業

#### 《期待される成果》

大学生にとっては、教育実習前に「教える」という立場から高校の授業を見ることのできるまたとないチャンスであり、第2章でも述べたとおり、教育実習を経験した多くの学生が一様に感じる、「初めて教育実習に行くと、とまどいを覚え萎縮してしまう」という不安を解消するのに役立つであろう。また、教育実習に行く前の年（学生によっては2年前の年）に実際の授業を見学することにより、教育実習、ひいては教職に就いたときの教案作りに大いに役立つであろうと思わ

れる。

高校生にとっては、授業を参観されるだけでは何の得にもならないだろうが、高校教員にとっては、教えるということが初めての経験である大学生に対して、手本を示すという新たな経験をすることになると思われる。

また、将来教職に就き、「次代の知的継承者の育成」に関わるであろう教職希望者を、大学という狭い世界だけでなく、実際に教鞭に立つ高校教員が育てることを通して、若い世代を地域全体で育てるシステムの中で、大学と高校がその一翼を担い、互いに地域貢献・新たな地域価値を育てることができるシステムにもなっている。

#### 《このコラボレーションの工夫》

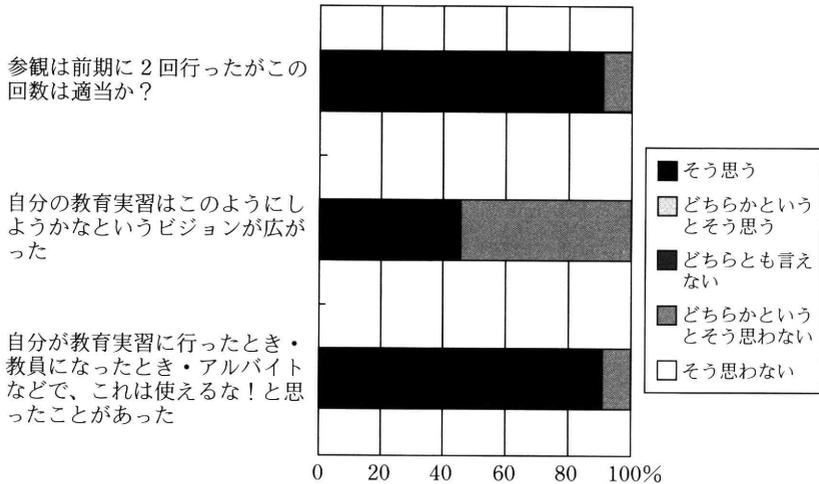
ただ授業を見に行くだけでは受身の経験になってしまうので、その経験をした後、見学した授業のいい点と悪い点を必ずインターネット上に書き込ませるようにした。それに対して高校の教員がコメントをつけるというシステムになっている。

この一連の行為を通して、大学生は見学する授業に対して、ただ「見学」するだけではなく、この教え方は盗もうなどと積極的に授業参観を「経験」するであろうし、また、彼ら自身の目から見た悪い点を必ず一つは書くことにより、ただ盲目的に感嘆の声をあげるだけでなく、自分が教壇に立つ際にはどうなのか、と客観的かつ批判的に見る目が育つであろうと期待されている。また高校教員にとっては、高校生ではない学生からの斬新な意見を聞くことが契機となって、自分の教案を見直す機会が生まれることにもなるであろう。

#### 《結果》

大学生にとってこの授業参観は、この上なくいい経験になったようである。教育実習に行った際にどのようなことをするのかということが具体的に描けるようになったようである。一人の大学生のコメント

表4 授業参観に対する大学生の反応



に、「教師が一生懸命なら、生徒も一生懸命になる」ということを書いた学生がおり、ますます教職に就く楽しさと責任を感じて人間的成長をした学生が多かった。

このコラボレーションが大学生にとってとても有意義な経験だったことは、アンケート結果が如術に表している。

また高校教員にとっては、高校生ではない学生からの斬新な意見を聞くことが契機となって、自分の教案を見直す機会が生まれることにもなった。長年教員をやっているも、常に試行錯誤を繰り返してより良い教育法を日々模索しているわけで、その中で、大学生活を通して大学教員の考える英語教育の理想型を教え込まれた学生の意見を通して、間接的ではあれ、大学教員が考える理想型を垣間見ることができたのは、高校教員にとって大いなる刺激であった。

次のステップとして後期では、大学生が高校で模擬授業をする予定である。これは、高校生からも大学生からもあがっていた要望で、「もう少し高校生（大学生）とふれあいたい」「大学生がもう少し授業

に積極的に参加するべき」という意見を反映してのことである。この報告については、別稿で論じたいと思う。

### 3.3. 出前授業

#### 《期待される成果》

このコラボレーションは、多くの高大連携が目標としているものが成果として期待される。

つまり、大学側としては、高校サイドに大学を知ってもらうという広い意味での入試広報活動の一環として位置づけることができ、また高校と連携することにより、高校生の実情や大学教育への期待を大学側が知り、そこで得られたものを大学教育活動の改善に生かしていくことができる。

一方高校サイドとしては、高校生へ刺激を与え進学したいという感情を強め、また、大学との関係強化の機会として意識され、また、最近大きく取り上げられ不安視されている、「学力の向上が停滞しかねない」、「学習意欲が維持できない」などの点を解消する施策として位置づけている場合が多いようである。上述の通り近年、英語は技能教科として定義付けられる傾向もあり、地味な訓練的な活動が教育活動のかなりの部分を占めている中で、日常の技能訓練とは違って学生の「知的好奇心」を刺激し、学ぶことの喜びを与えることが期待される。つまり、高校の守備範囲外のことを、higher educational instituteである大学から数回来て講義をすることは、高校生の知的刺激には大いに効能があり、また大学でどのような勉強するのかということも知ることができ、一石二鳥の動機付けになることが期待されているのである。

#### 《このコラボレーションの工夫》

高校生が大学の授業を受けることが有効であることは、これまでの

様々な高大連携の取り組みで明らかなことである。しかしながら第2章で明らかにしたとおり、これには3つの問題点が存在する。すなわち、(1) 大学の授業を受ける際には、高校の授業が終わってから参加する形が多いので、放課後あるいは土曜日に大学の授業を受けることになるが、放課後は、完全学校週5日制の実施に伴い時間割に余裕がないため参加が難しいし、土曜日は部活動を行っている学生は参加しにくい。(2) 高校への出前授業は、大学教員と高校教員との個人的なつながりによるボランティアで行われていることが多く、従って結果的にごく一部の教員に負担が集中し、かつ、高大連携事業に参画する大学教員への、大学からの評価が低いために、実質的にはボランティア活動になってしまうことが多い、(3) もともと中教審の答申に答えるべく高大連携が推進されたという背景があるためか、高大連携は高校生の学力向上が主眼になっており、そこには大学生の学力向上や、地域全体としての価値の創造といった視点が欠けているように思える。

このコラボレーションの工夫としては、上の3つの問題点を解決すべく、出前講義を高校の授業時間の中で((1)の解消)、大学生の教育を高校側にも手伝ってもらった見返りとして大学教員が行ったという点が挙げられる、これにより、(1)～(3)の問題の一応の解決をみたと言えるであろう。

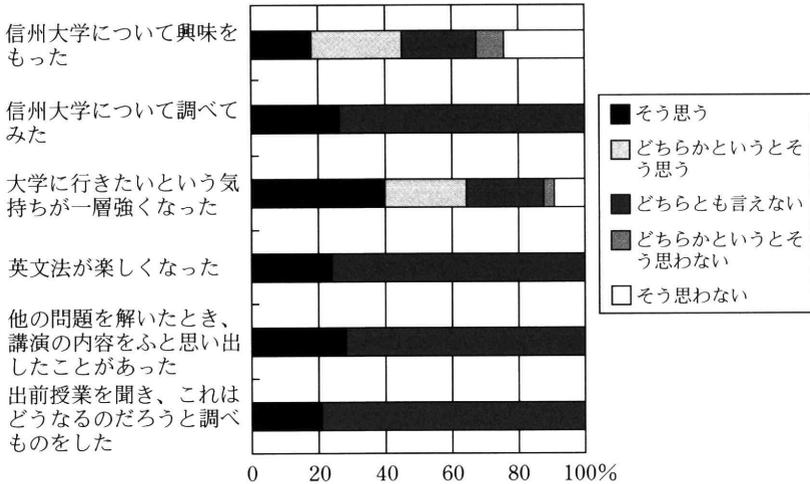
### 《結果》

出前講義は、6月7日と9月12日の2回に渡って行われた。大学の授業とはどのようなものであるかを知ることができ、高校生には大いに刺激になったようである。

以下がそのアンケート結果である。

印象的だったのは、1回目の出前講義の後でのアンケートで、次も来てほしいと多くの高校生が感想に書いたことである。大学の教員が

表5 出前講義に対する高校生の反応



直接高校生に語りかけることで、彼らに多くの影響を及ぼすことができると実感できた。

### 3.4. 大学生による、高校生に対する進学相談

#### 《期待される成果》

進学相談は、高校生にとって大きな利益になると思われがちだが、大学生にとっても、人間的成長を大きく促されたコラボレーションとして位置づけられる。大学生にとっては、自分たちより若い世代に接することで急速に責任感を身につけていき、上述の関西大学高大連携運営委員会委員長が言うとおりの、「年少者を世話することで自分の成長の過程を振り返り、年長者として自覚し、自分自身の今後に目を振り向ける契機である。そこには学生を大学の内部に囲い込むことでは得られない教育効果がある」ことが期待される。

高校生にとって利益があるのは明らかである。表1で明らかなおおりの、先輩からの体験談は、大学・学部決定時に大きく影響を及ぼす要

因であり、その要因によって進学先を決定した者は、大学の満足度が大きいことが報告されているが、この進学相談はまさに、この生の体験談を直に1対1で聞くことのできる貴重な体験だったはずである。

#### 《このコラボレーションの工夫》

このコラボレーションで工夫した点としては、英作文のコラボレーションの中に組み込んだという点が上げられると思う。英作文の添削をする際に、プリントの下部40%を大学生と高校生の通信欄にあて、高校生に大学生に対する質問等を書いてもらい、それに対して大学生に答えるという形をとった。

この工夫をした結果、英作文のコラボレーションに参加しない高校生にはこの進学相談コラボレーションに参加できないという弊害はあるものの、以下の2点において功を奏したといえよう。つまり、(1) (第2章で明らかにした高大連携の問題点にあるとおり) お互いのいる場所に出かけていくには、互いに時間の都合をつけなくてはならないなど、負担が大きくなるが、紙上で相談をうけるのであれば、互いの時間のあるときに相談をし、相談に答えることができる。(2) メール世代の学生にとっては、顔をあわせて直接聞くより、文字で聞くことにより、顔と顔をあわせて聞くには恥ずかしい質問もできたのではないかと思われる。

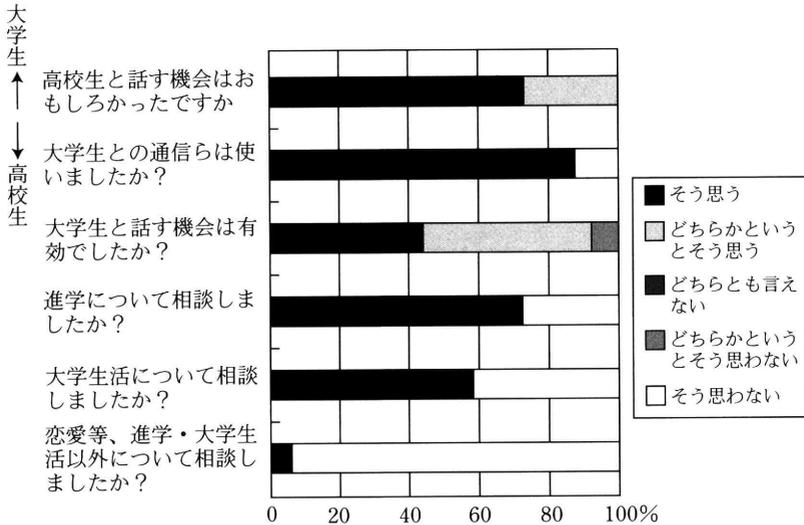
#### 《結果》

このコラボレーションは、大学生・高校生ともに、肯定的にとらえているようだった。

特に印象的だったのは、この進学相談についての自由意見を述べるアンケート項目に対しては、とても回答が多かったことである。このコラボレーションに対する意識が強かったことを示しているといえよう。

大学生の回答については、「現役の大学生だからこそ答えられるこ

表6 進学相談に対する大学生・高校生の反応



とがあるだろうからよかった」、「高校生はまじめに進学を考えているようで自分も将来についてまじめに考えよう」といったような、責任感と自己反省の色が見えるコメントが多かったことが特徴としてあげられる。これは、このコラボレーションが意図していた大学生の人的成長を推進することができたということを示しているといえるであろう。

高校生は、学年があがる毎に、進学・受験勉強についての質問が多く、このコラボレーションを有効に使っていることが伺えた。回答の中には、「大学生が熱心に答えてくれたのでがんばろうと思った」や、「すべてのコメントが印象に残っている」「視野が広がった」などこのコラボレーションが有効であったことを示すものが多く、中には、「英語科に進む人しか質問できなくて残念」（答える大学生が英語学専門の学生が多いので）と、もっといろいろな質問をしてみたかったということを表す回答もあった。

#### 4. 結論と提言 —地域価値を高める双方向高大連携—

以上、高大連携という視点からみた、信州大学人文学部英語学分野と長野県松本県ヶ丘高校とのコラボレーションの報告をした。このコラボレーションが、英語教育の観点からみて有効だったかどうかについての検証は、稿を改めたいと思う。

本稿では「接続教育」ばかりに主眼が行く高大連携がもつ問題点を解決しうるような地域価値を高める双方向高大連携を提案し、その取り組み例を報告したわけだが、その取り組みは、さらなる改善が必要なものの、一応の成功をみたといえよう。

このような双方向高大連携のとりくみは、大学と高校等とが「共に」若い世代を育てる組織として実際に効果を挙げている先駆例だと言ってもよいであろう。学年で輪切りにし、それぞれの段階をある母体だけが責任をもって行うといった取り組みではなく、教育機関が「共に」手を携え若い世代を教育する必要があるのではないだろうか。つまり、高大連携の意義は、少子化時代の若い世代を、社会全体で育てていくということにあり、「接続教育」や受験生の掘り起こしというような近視眼的な目標だけではなく、社会貢献・地域貢献・教育・就職支援・受験層開拓などなど多種多様な役割をもっているものとして位置づけられなくてはならないであろう。この点は、中教審答申「新しい時代における教養教育のあり方について」でも言及されている。

この取り組みは、引いては地域価値の創造につながることは必至である。

このコラボレーションが新聞・テレビ等のメディアで取り上げられた後、信州大学人文学部英語学分野には、卒業生から英語教員を紹介してほしいという問い合わせを数件いただいた。その際、このような

しっかりした教育を行っているところから英語教員をとりたいというありがたいコメントも頂戴した。

前掲の通り、授業参観をした大学生のコメントに、「教師が一生懸命なら、生徒も一生懸命になる」というのがあった。地域ぐるみで手を携え一生懸命に「共に」若い世代を教育すれば、その成果は自ら上がるものであると信じている。これからますます、「共に」地域価値を高めるような双方向高大連携が盛んになることを願ってやまない。

#### 注

- 1) この要因と満足度には必ずしも因果関係があるとはいえない。というのも、表1の上の6要因は、その要因を受け学生自身が判断し、つまり、学生自身がアクティブに起こした行為であるのに対して、下の3要因は、受け身的に起こした行為といえる。そして、心理学の理論で明らかにしている通り、人間の心理としては、自分で起こしたアクションに対してはなかなか否定的な立場をとりにくいものであるからである。しかしながら、本稿は、その因果関係を問題とするものではなく、高校生の大学・学部選択の際にどういった要因（チャンス）が関係するかを問題にしているわけである。表1では、高校生が選択する際、一つでも多くの情報を与えることが有効であることが示されている。そこで本稿では、学部説明会や出前授業は、学生が自らの意志で選択するために必要な情報を一つでも多く与えることができるという意味で有効であるという立場から、学部説明会・出前授業等は、積極的に行われるべきであると考え。
- 2) アンケート結果を見て、「英語力があがったか」という質問に対しては、実際には半分程度の学生が「どちらとも言えない」と答えているが、このアンケートの質問項目は、「このコラボレーションを通して英語力があがったか」という質問であったため、これによって「のみ」あがったかどうかについて、高校生は判断しかねたのではないかと推察できる。

#### 【参考文献】

- 品川哲彦 2006. 「若い世代をともに育てる組織として一関西大学の高大連携のスタンス」『大学と学生』25号、日本学生支援機構編、第一法規：13-20.
- 福岡忠彦 2002. 「高大連携と学生満足度 第1回：一高大連携の推進状況に関するレポート」ベネッセ教育開発研究センター.
- 淵田 良男 2004. 「九州大学高大連携の趣旨」『16年度地域貢献特別事業 高大連携シンポジウム：高校と大学の教育連携 一大学生からみた高大連携の課題 報告書』九州大学高大連携推進専門委員会.
- 増子 繁治 2002. 「学力向上を目指した高大連携プログラム等のあり方について」

『学力フロンティアハイスクールの研究』千葉県教育総合センター <http://www.ice.or.jp/~fhs/makusou.pdf>

(はなざき・みき／信州大学人文学部講師)

(すぎやま・ゆうじ／長野県立松本県ヶ丘高等学校教諭)

(はなざき・かずお／信州大学全学教育機構講師)

(はしもと・いさお／信州大学人文学部教授)

### **A Bilateral Collaboration between University and High-school that Aims to Enhance the Community Brand**

**【Abstract】** Since the governmental report on education in 1999, many attempts have been made for the joint programs between high schools and universities. This paper reviews the on-going programs, clarifies their advantages and shortcomings, and proposes a new model of “bilateral collaboration,” which will overcome the shortcomings of the present models. Many of the present joint programs involve only the one-way communication from university professors to the high-school students through lecturing. However, this new “bilateral collaboration” involves communication between not only professors and high-school students, but also, university students and high-school students, professors and high-school teachers, and high-school teachers and university students. Through these various channels of communication, this collaboration aims not only to carry out the supplementary education to high school students as many present programs intend, but work collaboratively in educating the young generation (both high school and university) and through

this education, enhance the “community brand”.

**【Keywords】** joint program between university and high-school, bilateral, collaboration, TESL, community brand